

## <フィールドワーク・レポート (2019/4) >

### 子供たちの笑顔も桜も満開！第23回なにわ人形芝居フェスティバル

あたたかな陽射しのもと、寺社の境内やお堂、会所を舞台に、人形劇、紙芝居、落語やアートパフォーマンスなどが繰り広げられた。桜が満開となった2019年4月7日、日曜日。大阪市天王寺区にある茶臼山や逢坂周辺の寺院や神社、坂と緑が連なる地域で、23回目を迎えるなにわ人形芝居フェスティバルが開催された。ふだんは静かな界隈が、この日ばかりは家族連れで賑い、なごやかな時間が流れていた。

1996年の初回立ち上げ時の経緯を改めて振り返ると同時に、23回目を迎えるまでの取組みについて追ってみた。

茶臼山や逢坂というのは、大阪市の丘陵部、上町台地にある下寺町の南側に位置する。下寺町とは、大阪夏の陣の後、大阪城代松平忠明が市街地の整理再編を行った際、街中にあった寺院が、まち外れに放り出されて集められ誕生した寺院群である。北は大連寺から南は一心寺まで、ずらりと25か寺が並び、上町台地の聖地性が増したのではあるが、実際は、各寺院が、まちなかの信者や檀家からひき離され、本来のコミュニティとしての機能を失ってしまった。一方で、大坂が天下の台所と呼ばれるほど栄え、人々の生活にもゆとりが出てくると、庶民の間では戸外での行楽が盛んになり、中でも寺社参詣が、花見や散策などの娯楽の口実となった。特に、上町台地は、緑豊かで花の名所が並び、「四十八地藏めぐり」や「三十三箇所寺観音めぐり」など、ご利益のあるレクリエーションの場として、ハレの空間、観光ゾーンとなり、中でも下寺町、夕陽丘一带は、物見遊山の場として料亭もあり、多くの人で賑わったという。明治以降、周辺の遊所が廃業移転したり、住宅開発や学校の立地が相次ぎ、その後の空襲でかなりの被害を受けた。なんとか寺院は復興したものの、門を閉ざしていることが多く、境内にも入りにくく、周辺の小道は駐車やごみ等で風情を壊され、マンションやビルも増えて昔の景観や賑わいはなくなり、歴史の匂いが消えてしまっていた。



そんな中、1993年、下寺町の南に「一心寺シアター」がお目見えした。大阪の古典芸能や小劇団の公演など、商業的興業にのりにくい文化に対して、一心寺が「場」を提供するという形式をとり、以来地域文化の育成の場として認知されてきた。当時一心寺の住職（現在は長老）の高口恭行さんは、「将来的には、親睦や奉仕なども中心とした活動ができるようなクラブハウスのような組織と空間のあり方を追求したい」と言われていた。その後、境内東側に三千佛堂を再建し、日曜学校や法話、説教などを開催している。講堂はおおむね公開されているという。さらに地下に＜一心寺シアター＞を移して「倶楽」とネーミングし、ひき続き活用されている。

創設時からこのシアターを運営するプロデューサーから、下寺町で人形芝居フェスティバルを開催してはどうかと相談を受けた一心寺住職が賛同して、下寺町の各寺院に声をかけたところ、大蓮寺副住職をはじめ、各寺の住職も面白そうだと協力することとなった。各寺では、檀家と離れ地域との接点を失いつつあることに問題意識を持っていたが、一か寺ではどう動いてよいかわからなかったという。こうして、1996年3月23日、24日の2日間、第一回なにわ人形芝居フェスティバルが開催された。6か寺の本堂や境内と2つの劇場で、人形劇をはじめとする催しが上演され、他の寺院もスタンプラリーのポイントとして協力した結果、多くの親子連れが、人形劇やスタンプラリーを楽しむため、下寺町を南北に限なく歩いてまわることとなり、界限が大勢の家族連れで賑わった。来場者は、2日間で2万人にのぼったという。

もともと祭りというのは、神仏を祀ることであり、その神仏への通用門である寺で、それまで埋もれかかっていた本来の役割、地域に開かれた遊びや学びの場であるべきことが思い起こされた。未来を担う子供たちも多く出入りしていたという歴史が表に引き出され、そのことを、各寺院の住職たちは、大変喜び、さらに住職を中心にした地域の間関係も活性化したという。

下寺町の北の端では、翌年の春、大蓮寺の塔頭寺院として、「應典院」がオープンした。昔、お寺が寺子屋のような学びの場であると同時に、境内は勸進興業をはじめとする芸能の場であったことから、地域文化やコミュニティを育てた寺院の伝統的な役割を今に再現したい、という趣旨でスタートした。宗教宗派にこだわらず、広く門戸を開き、芸能・アート、ボランティア、カウンセリング、生と死をテーマに、学びや気づき、出会いの場を提供しようという試みである。こうして、下寺町の北と南に、地域に開かれた「場」をもつ拠点ができたのである。

これに勢いを得たのであろうか、なにわ人形芝居フェスティバルは1回に終わらず、1998年に第2回、1999年の第3回と、参加寺院がさらに増え、若い副住職たちも含めて、お寺が自主的に動いて、運営プロデュースするようになった、ということである。

立ち上げの時期から今日までもはや20年以上、この祭りは継続して行われているが、その間、どのようなことが起き、どんなご苦労や工夫があったのであろうか。

近年のこのフェスティバルのガイドブック冒頭において、発起人として、一心寺長老高口恭行さんがこのようなご挨拶をされている。(以下抜粋)

坂と緑と社寺いっぱいこのエリアは、大阪を代表する「風致地区」であるばかりではなく、古代の「四天王寺」「難波の宮」、中世の「熊野参詣」「日想観」、近世「大坂夏の陣」等の歴史の舞台となった大阪の歴史物語の中心地でもありました。まさしく「大阪の顔」の一つであります。

このエリアを大阪の子ども達に体験してもらいたいです。坂と緑と社寺いっぱい、歴史の香りいっぱいの「夕陽丘」で人間の夢「人形芝居」を楽しんでいただきたいのです。

大阪が子ども達の懐かしい自慢の「故郷」になりますようにと強く願う、一心寺の長老高口恭行さん(以下、長老)は、その思いをいろいろな形で発信され続けている。改めてお話をうかがった。

「今年の人形芝居フェスティバルは、桜も見事で、天気も良く本当に喜んでます。私も80歳が目前になっているんですが、何とかやっております」と、にこにこ出迎えてくれた。さっそく、立ち上げから今日まで23回の中でのご苦勞を聞くと、「うーん、最初のころ、ちょっとごたごたしたけれど、そのくらいかなあ」と、話が始まった。

「下寺町沿いの寺院は、大江組というお寺の町内会があり、組長は偶々一心寺と懇意のご寺院だったので、私から人形芝居のイベントを開催したいと言い出しましたところ、組長以下25か寺のうち前向きに参加しようと手を挙げたのが、当初5~7か寺、他は、しかたなく参加している、という状況がしばらく続きました。それで、4年目か5年目だったか、私が意見を聞きに責任者集会へ出向いたのです。すると、あの時のことは忘れもしない、ある若い住職からこう言われました。「江戸時代に黒船がやってきたのと同じことで、開国を迫られた気分ですね」と。一心寺という大寺に迫られたら開国せざるをえない、と言われたんですね」と、長老は昔を思い出して、苦笑いした。

寺院といっても規模はさまざまであり、一心寺のような、広い境内があり休憩所が整備されているところは多くはない。寺は、檀家の法事などで外から人を招くことはあっても不特定多数に開かれているわけではなく、たとえば、御手洗が奥の方にあたりしますから。すると、住居スペースに入って来られることになる。年に1回とはいえ多数の来訪者が使用するとなると、見張りの人を置かざるを得ない。建物や庭が、傷つけられる可能性もないとは言えない。さらに、「いらっしゃいませ、ようこそ」と、不特定の大勢を笑顔で歓迎することに住職はあまり慣れておらず、何かと大変な思いをするというのである。一方で、このイベントで、家族連れや子供たちが寺に足を運び、楽しそうに過ごしているその笑顔を目にして、今日の寺のあり方を考えなおさなくては、という問題意識が芽生えたのは確かだという。

「そこで、最初は前向きでなかった住職も“毎年はしんどいが、一年おきであれば協力しましょう”と言って、話はまとまりました。しかし、やる限りは毎年催したい。そこで、

一心寺界限は毎年、下寺町全体では一年おきに、毎年4月の第一日曜に開催することになりました」と長老が説明する。

今年は、一心寺界限での開催であった。日曜学校を行う三千佛堂の他、歴史案内と休憩所を兼ねる存牟堂など、一心寺が徐々に設立した会所がフルに使用されたほか、茶臼山会場では次々に紙芝居が開催されていたのが、20年前との大きな違いであった。もともと、天王寺公園は有料であり、さらに入口は天王寺駅前のみで、一心寺近くは出口しかなかったため、有効に利用されていなかった。

「大阪の陣400年記念、橋下市長の時ですね。大阪市が、公園整備をして民活を促進しようということで注力してくれて、一心寺も茶臼山の碑をつくらせていただき、塀で囲まれていた天王寺公園が無料オープンとなり綺麗になって、一心寺まで通り抜けができるようになったんです。これは良かった」と、長老が実感をこめて語る。



「この次に出てくる動物、わかるひと？」「はあーい！」たくさんの手が挙がり、笑顔があふれる。

茶臼山では、絶え間なく紙芝居が続き、親に見守られながら、子供たちが大喜びしていた。



ふだんは、閑散とした寺の境内に親子連れが大勢訪れた。

運営については、5年前から、長老のご子息（三男）の高口真吾さんが携わっている。「一心寺住職は長男が継いでおりますが、地域でのイベントなどは若住職の一人でとりまとめるのは大変なので、それで三男が役者をしたいと東京へ出ていたのを呼び戻して、一心寺の塀の外の文化事業、人形芝居フェスをはじめとする活動をやってくれないかと頼んだのです」と、同席していた高口真吾さん（以降、真吾さん）を紹介してくれた。「それで、一般財団法人一心寺文化事業財団を立ち上げ、理事として着任してもらいました。それ以降、また人形芝居フェスティバルも、少し雰囲気が変わってきましたね」と長老が話す。



スタッフの方々のあたたかい笑顔に  
ほっとさせられた。

それまでは、受付や整備係として、一部、日曜学校の生徒など地域の方がボランティアとしてサポートしていたものの、ほとんどは主催者が謝礼を払って劇場スタッフを雇っていたという。ところが真吾さんに代わってからは、スタッフの多くがボランティアとなった。真吾さんによると、「今はインターネットの普及で、ボランティアを募るサイトがあり、気軽に公募できるようになった。試しに掲載してみると、すぐに必要な人数集まったんです。イベント全体に手作り感が欲しくて、運営スタッフは、主催者とお客さまの中間のようなポジションが理想的だったので、助かりました」。

確かに、スタンプラリーのハンコを押してくれるおじいちゃん、会場入口で、小さな案内板を持ちながら大声で呼び込んでいる女性、学生の姿もあちこちで見られ、みな、笑顔で対応してくれて大変気持ちよかった。真吾さんは演劇活動の中で知り合った方と結婚されたのだが、このお嫁さんが催しの裏方をするのが非常に得意で、ボランティア募集のサイトを探し出したのも彼女だという。細かいところによく気が付くのだと長老が褒め、真吾さんも頼りにしている様子であった。

「もともと、このお祭りは、長野県飯田市の“いいだ人形劇フェスタ”から発案されたのですが、毎年、全国から優れた人形劇団が集まるこのフェスティバルに飯田市まで妻と二

人で見に行って、次回うちで上演してほしいと考える劇団に声をかけています」と、真吾さんは、楽しそうに話す。飯田市の人形劇フェスタは、毎年8月に約1週間開催される日本最大の人形劇で、公演数は400以上、毎年動員数は5万人にのぼるといふ。筆者も以前一度だけ行ったことがあるが、人形劇のバリエーションと奥深さ、そして人形劇は子供だけのものではなくむしろ大人のものであるということを感じさせられた。今回、一心寺界隈で見た演目の中でも、いわゆる人形が出てこない、想像力をかきたてるアートともいえる静かな作品や、博物館に入る直前の貴重な人形を最後にお披露目するといった、大人向けのものがあつたのもうなづける。露店は、天王寺の伝統野菜や福祉作業所からも出店されており、地域とのつながりが感じられた。



右：一心寺シアター倶楽部入口

左：一心寺三千佛堂でのパペット落語



ところでこの日、一心寺界限と少し離れた下寺町の2つの寺院でも、“下寺町活性化プロジェクト「花祭り」夕霧太夫行列”と銘打った催しがあった。江戸時代、大坂で廓があった新町の遊女の中で最も美しかったといわれ、近松門左衛門や井原西鶴の作品の題材にもなったのが“夕霧太夫”である。その墓が、下寺町の浄國寺にあることから、大阪の歴史文化でまちを活性化させたいと、この催しが3年前に始まった。夕霧太夫、新造（若い見習いの遊女）禿（童女）を含む、大勢の行列が、金臺寺（こんたいじ）から浄國寺まで、太夫行列を行った後、法要を行うというもので、両寺では人形劇やお茶席など、見物するすべての人が楽しめるプログラムを提供していた。これは、近年毎年開催されており、2年に1回の下寺町全体での人形芝居フェスティバルの時は、その中の催しの1つに含まれる。



夕霧太夫行列の賑わい



夕霧太夫墓（浄國寺）

二十数年前、下寺町界限に人形芝居フェスティバルが立ち上がった頃から、住職が代替わりした寺がほとんどである。「今の住職は、副住職の頃からこの動きを見ている。10年20年、続けていると、お客さまを迎え入れることに慣れてきた、といいますか、いつも

頭の端っこに意識が残っていて、たとえば、寺を改装しようという時があれば、“そうそう、便所も1つ、人が出入りしやすい場所についでに増築しよう”などと、寄り添っていきよくなってきたんですね」と長老が語れば、真吾さんも「今の住職は、私と同じような30代くらいの年頃でまだ若い人も多いのですが、寺の現状に危機感を持っているようです」という。「昔は、寺が、幕府の末端組織として、住民の動向、キリスト教の禁止など監視をしていた時もあった。地域の住民の管理をしており、結婚したら届けるといった区役所のような役割もあって、何もしなくても地域と寺のつながりがあった。今はそれが無い。このままでは、だれも振り向いてくれなくなる。寺のアイデンティティとは何か、寺の思想として、何を必要とし何を求めていくか、ということを改めて考えるようになってきた、ということでしょう」と長老が説明を加える。「置かれた場所で咲きなさい」という本が注目されたが、まさに坊さんは、遠い昔からそれを考えていて、道や池をつくったり、無料の宿をつくったりしてきた。江戸時代からはそれを自分で考えることができない時代が続いたが、今はまた、その考え方が着目されつつあるんですね」。

真吾さんによると、そのような意識を持つ寺の住職は確実にいて、その証拠に昨年度下寺町一帯で行われた人形芝居フェスティバルには、ほとんどの寺院が参加・協力し会場数は27であった。毎年参加したいという声も増えてきたという。夕霧太夫行列が毎年開催されているのも、その思いの表れなのであろう。「ぜひ他の寺も毎年催しに加わってもらえるよう、広げていけたら」と、真吾さんは静かに語る。

ふだんは、日々の生活や仕事に追われ、あまり意識しない人も多いであろう寺や寺町。その今日的な存在の意味・意義を、若い担い手たちが気づき、もっと活かし発信したいという思いが芽生え、継続して重なっていくことは、まさに地域の底力であり誇りとなる。来春は、下寺町全体での開催である。子供たちはもちろん、それぞれの立場で参加する方々の心に残る1日がさらに重ねられるよう、楽しみにしたい。

(大阪ガスエネルギー・文化研究所 栗本智代)



右より、一心寺長老 高口恭行さん、高口真吾さん





第23回 公式ガイドブック表紙

有料公演フリーパス（700円）を申し込むと、左下に青い丸いシールを貼ってくれる。それを見せれば、どの会場でも入れるという仕組みである。

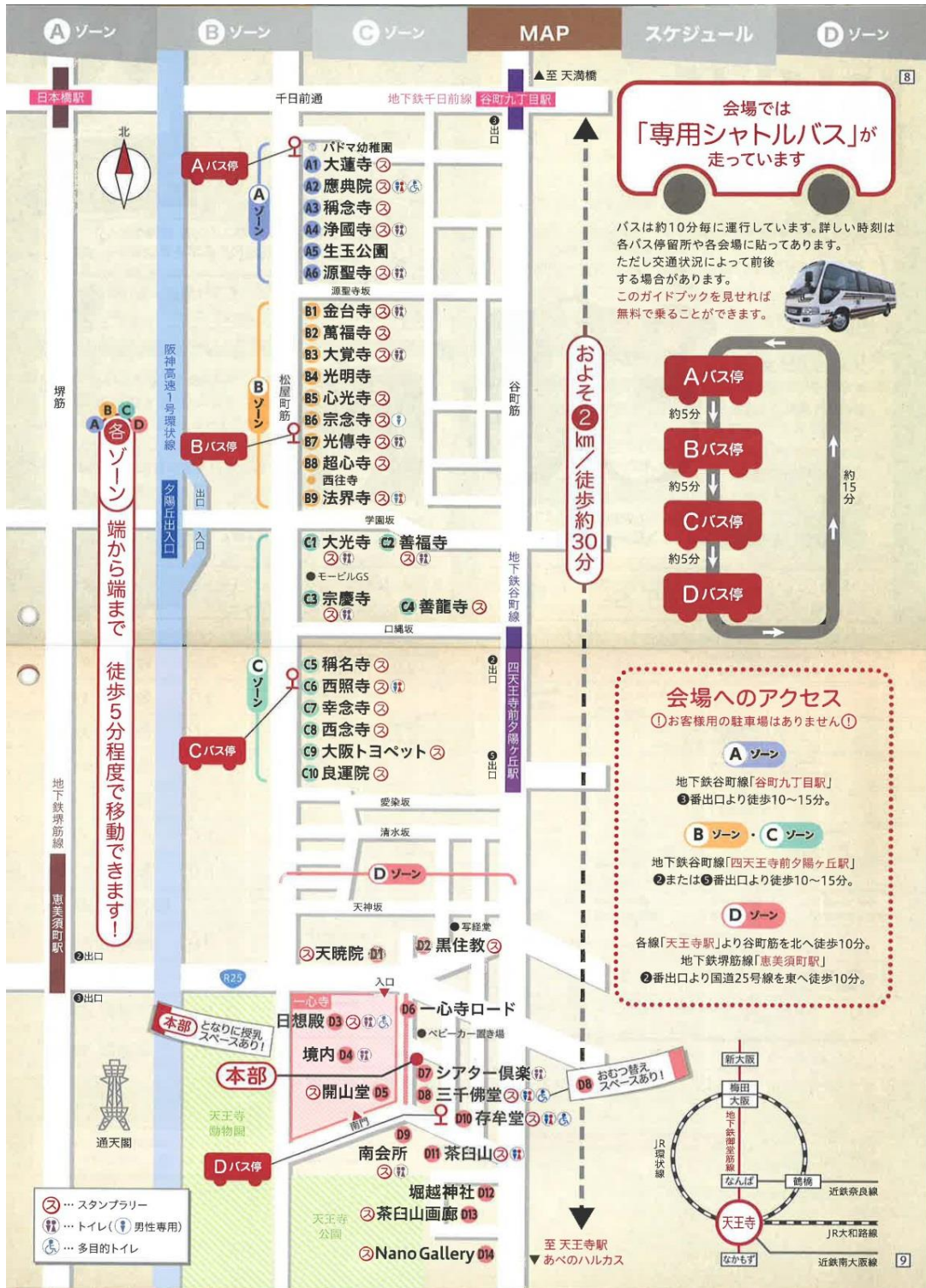
<p><b>1 天暁院</b> てんぎょういん</p> <p>ゆい＊バベツシアター 三味語り人形芝居「唄って♪おおおかみさん」 ●10:15～●12:00～●13:45～ 各30分</p> <p>ウサギとアタのわんぱくちゃんたちと出会って大騒動！昭和歌謡ムード漂うおおおかみ哀愁の物語。ひとりで三味線弾いて唄って演じます。</p>	<p><b>4 開山堂</b> かいざんどう</p> <p>●10:45～●13:30～ 各20分 <b>人形芝居 燕屋</b> 腹話術「ハロー・カンクロー」</p> <p>信州を拠点に全国で上演する他、他劇団の演出もしています。この夏には人形劇団京葉の演出を担当しますので、お楽しみに。今回は、ちょっと生意気な鳥カンクローとのおかしなトークショー。ぜひお立ち寄りください。</p>
<p><b>6 シアター倶楽</b> しあたいくら</p> <p>出口座+江戸糸あやつり 上方落語「江戸荒物」+江戸糸あやつり「獅子舞い」他 ●10:00～●13:45～ 各40分</p> <p>マリネットの出口座を主宰した阪本一房生誕100年に、残されてきた人形、道具等が関西大学に收藏されることとなり、出口座の人形たちの最後の出番を、江戸糸あやつりの上條亮の賛助で、ここにご覧いただけます。</p>	<p><b>人形劇・トロッコ</b> 「トランクシアター」 ●11:45～ 各30分</p> <p>トランクからいろいろなものが出てきます。ちょっとへんてこりんなもの、おしゃべりばかりする人形も、それから人形劇の世界では知る人ぞ知る、今年で生誕70年になるあの「仲よし」も演じます。</p> <p><b>鬼のゴンちゃん一人旅</b> ●10:45～●12:30～●14:45～ 各30分 「鬼のゴンちゃん一人旅」 赤鬼のゴンちゃんは、980年を生き抜く「語りべ」です。皆さんがよくご存じの昔話をゴンちゃんの視点でお話します。笑いあり涙ありの大型手遣い人形劇をたっぷりお楽しみください！</p>
<p><b>3 一心寺境内</b> いっしんじけいだい</p> <p>フラメンコ集団 tAma.連 ●10:00～●12:30～ 各30分 「明るく！真面目に！前向きに！」 舞台やパーティ・各種イベント等でバワフルに活動中！華やかさはピカイチ！今日もみんなと一緒にオレ！</p> <p><b>舞昆のこうはら</b> 発酵食品「舞昆」は、健康を気遣う方にもおすすすめ。舞昆があると家族みんなでお食事もできるのをお参りの際ぜひお立ち寄りください。</p> <p><b>街かどマーチ</b> (NPO法人マーチ) 阿倍野区で主に知的障がいを持った方たちの通所事業所です。手作りのカレーパンや揚げパン、特製ラスクとクッキー、幻のレインボームスも販売！</p> <p><b>ユニセフ</b> 最近ではイベントに参加している子どもたちに遊びながらユニセフを知ってもらったり、独自の写真展を開催したり、工夫しながら募金活動に取り組んでいます。</p>	<p><b>似顔絵「微笑美くらぶ」</b> ●10:00～15:30 終日 描いてもらった似顔絵はほんものそっくり！毎年行列ができる人気のコーナーです。一人で、親子で、カップルで、この機会にぜひ描いてもらおう！ 1人100円</p> <p><b>わらし/WARASHI</b> 「わらしショー」 ひよっこお面の言葉を使わないノンバーバル和風パフォーマンスユニット。 <a href="https://warashiyottoko.wixsite.com/home">https://warashiyottoko.wixsite.com/home</a> ●11:30～●14:30～ 各30分</p> <p><b>阿倍野まわり作業所&amp;茶来</b> 阿倍野区にある主に精神障がいをお持ちの方が通っている作業所です。阿倍野区の人気マスコットキャラクター「あべのん」を型どったクッキー他、「バターサブレ」や「アーモンドせんべい」なども販売しています。</p> <p><b>たご焼工房 Sea&amp;Sun</b> オリーブオイルと天然塩で味付けした、イタリア風なたご焼「伊たご焼」が大人気！大阪MORI-KADOGULメグランプリ2年連続優勝の実力店！</p> <p><b>レモンドロップス</b> 難病の子どもとその家族が中心となって生まれた社会活動団体です。国産レモンの手作りレモンードで、全国の小児病院・病棟で子ども達のために活動する団体を支えるための募金活動を行っています。</p>

第23回公式ガイドブックより。

この日、一心寺山門前への来場者は、約9000人という賑わいであった。

第22回 公式ガイドブックより（2018年開催）

2年に1度、下寺町界隈で開催された時の状況。専用シャトルバスも走っている。



※この日、一心寺山門前の通行者は、  
11000人にのぼった。